

筑波大学日本文学会会報

第22号

1998年2月

ことしの夏'97	新保邦寛	一
日本文学会だより	三
研究室だより	四
教官新刊紹介	八
卒業生だより	九
日本文学会教官学生名簿	一二

ことしの夏'97

新保邦寛

せめて、日本ぐらいは漏れなく見てやろうと思いついて、かれこれ十数年になる。当初は単に、小田実や沢木耕太郎に影響されてぐらいの漠然としたものに過ぎなかったのだが、いろいろ発見が重なっていくにつれ、もしや明治文学を全く新しい視角で見直すことが出来るのではという欲がでてきた。加えて最近は辺境が気になりだした。周縁が周縁としか見えないのは、あくまで東京中心の思考に囚われているからであって、地図を拡げてみれば一目瞭然ながら、日本の南端も北端も、むしろ外側の世界に開かれており、それ故情報報の尖端でもあり得ると、船戸与一『蝦夷地別件』に教えられたからである。現に、「太平洋戦争」が勃発した折、沖縄の人々は日本の敗戦を承知していて、なかには国外に脱出を図った者もあったと言う、去年の夏、摩文仁の丘へ向うタクシーの中で、老運転手が語ってくれた。

今年の夏も、八月初旬に北海道教育大学大学院で集中講義を済ませた後、十日余り北海道を旅して廻った。目的の一つは、オホーツク沿岸の町々を見ることだった。網走やサロマ湖までは、情報も多くよく知られているが、更に北の、湧別・紋別・枝幸・浜頓別などの町々となると、札幌で五年暮した私でさえ、ほとんど何のイメージもない。旅行情報などによって齎らされた事態とはいえ、まるで

關下の世界のように思えてしまう。しかも驚いたことに、旭川なり札幌なり、大都会との縦の交通は相応にあっても、沿岸の町々を結ぶ横の交通が頗る悪い。無論、国鉄が通っていた頃はそんなことはなかっただろう。廃線によって地域の独自の発展の芽が摘みとられ、いわば衛星都市のような形に改編されたとも言えるか、ますます辺境性が強調される結果になっていることは否めまい。紋別市立郷土博物館の因幡勝雄館長は、そうした事態に危機感を抱く一人で、オホーツク文化の研究を文化運動にまで押し上げようと、毎年大掛かりな講演会を主催し、その報告の『環オホーツク』も四号を数えるに到ったと言う。ご好意で戴いた部厚いそれを、門外漢の私が、市内の喫茶店に腰を据え熱い思いで読み耽ったのも『蝦夷地別件』と全く同じ発想を見ていたからだが、価値相対化などという東京での議論が、つくづく机上の空論に思えてしまったことだった。

それにしても、真夏の日にストーブを焚くこの土地は、甘くはない。実は、この夏私をオホーツクへと駆り立てたのは、立松和平の小説『毒』であった。足尾鉍毒事件に追われた谷中村の人々がサロマへ集団移住したと知って、その後どうなったのか、気になって仕方がなかったのだ。何かしら足跡の一端でもとの願いは、しかし虚しく、買い求めた本にも何一つ記述はなかったものの、今はもう一、二軒残っているかどうか、帆立の養殖以外この地に生活基盤を築くのは難しいからと、今回は若いタクシーの運転手が話してくれた。サロマを訪れた日は、悪天候に泣かされた旅の中では例外的に晴天に恵まれ、大町桂月を偲びつつ歩いた「龍宮街道」も美しく、すっかり観光地に様変わりした光景に、谷中村の人々の苦闘の跡など窺いようもないのだけれど、薄暮のオホーツクの海の重苦しさは、風景の奥に潜められているものを、それとなく教えてくれた。

オホーツクに長くいたせいも、何だか無性に明るい所へ行きたかった。函館まで一気に南下するつもりが、ふと、伊達紋別に途中下車する気になった。若き日の佐々城信子が過した町、木原直彦氏や木村真佐幸氏の本を見ても、彼女の足跡を示すものなど何もないと知れていたが、とにかく見てみたかったのだ。巨理伊達家の栄華を止める「開拓記念館」に遊び、早めに駅に戻る道すがら、何気なく入った本屋で「舟岡町」に佐々城豊寿・信子母娘の住居跡の標示があると知った。駅に向かって左手を、オートザムの看板のある所まで一キロ程歩けと言うのだ。しかし時間がない。時計をにらみつつ小走りで向った私は、ローソンに駆け込み、フィルムを買ってタクシーを呼んで貰い、「西紋釧郵便取扱所跡」の標示と並んで立つ案内板に向かってシャッターを切り続けた。伊達開拓の功労者として銅像が立つ田村顕允は、豊寿の父の星雄記の友人なのだが、その田村の招きで、郵便取扱所の右隣の大槻宗之進の別邸に、三年、信子は住んだと言う。もう一つの旅の目的が計らずも満たされた幸福な一瞬だった。列車に間に合ったのは、言うまでもない。